郷愁

紫月

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14809567

ヒュンマ

切ない話も好きですが、穏やかな幸福を感じさせる話も大好きです。
オリジナルキャラクターとして、ヒュンケルの息子が登場します。
ご了承下さい。

Table of Contents

郷愁

そういえば、かつて占い師の娘が言っていた。
多くの魔法と神秘に満ちたこの世界、その中で唯一、人間の手出し出来ない存在が「時間」であるのだと。それは神のみに与えられた、不可侵にして不可思議な領域であるのだと。
――――誰だって、時間を逆流させることは出来ないんですわ。
ふたりきりで話すことなど、めったになかったように思う。その日もどうしたきっかけでそのような会話をしていたのか、まったく記憶に残っていない。
――――長い歴史の中で、人間は多くのことをこなせる力を身に付けてきました。空気中の成分を操作することで、炎や氷を生み出すことも可能になりましたし、自分自身の身体をいったん原子レベルにまで分解することで、空間を移動することすら出来るようになりました。それでも、どんなに偉大な魔法使いにも、時間を動かすことだけは不可能なんです。
そう語る彼女の、深く真理を悟ったような目が、とても深く穏やかな色をたたえていたことだけを覚えている。
――――だが君には、時空を越えて物事を見通すことが可能だろう。過去のことはもちろん、未来に起こる事柄さえ予知することが出来る。
――――ええ。でも見るだけですわ。なにひとつ、変えることは出来ません。
そこで彼女がふっと漏らした笑みは、寂しいような達観したような、複雑な感情を滲ませたものだった。
――――時々、虚しくなることがありました。目の前の人が、このままではどのような運命を辿るのか、それが分かっているのに手出しは出来ない。もしも私に、その人を悲惨な行く末から救う力があればって、そう願ったこともあります。
なるほど、自分などには及びもつかない苦悩もあるものなのだなと彼は思った。能力というものは、それを持たない人間からはただ便利でうらやましく思えるものでも、保持してしまえばどう使うかと

いう新たな問題が発生してしまうわけだ。
もっとも頭に浮かんだその感想が、今この場で発言するに適した内容とも思えなかったし、咄嗟に気の利いた慰めを口に出来るほど、器用な性格だとは自覚していなかったので、彼は何も言えずに黙り込む。
―――でも。
沈黙をどのように理解したのだろう、娘はそこでふわっと緊張がほどけるような笑顔を見せると、まるで彼のことを励ますかのように明るい口調で言葉をつなげた。
―――誰かの未来を変えたいだなんて、ひどく傲慢でおこがましい感情なんだっていうことに、あるとき気が付いたんです。確かに人間には、天から与えられた運命というものがあります……これは、どうあがいたって変えることは出来ない事実です。例えばレオナ姫が一国を導く立場にお生まれになったこととか、ダイさんが竜の騎士の血を受け継いでいることとか。私だって、そうですわ。予知能力を携えて生まれたのは、私が好むと好まざるとに関わらず、神様から与えられた運命なんです。それを重荷に感じ、恨むことは簡単ですわ……かつての私がそうなりかけていたように。
でも、そうじゃないんですね。娘はそこで目を伏せると、なんとも優しい愛情に満ち溢れた表情を見せた。
―――苦痛も困難も、自分に与えられたものはすべて引き受けた上で、その中に光明を見出すこと。いかに前向きに生きるのかということ。それが大切なんだって、大魔王との戦いの中で知らされました。そうすることが出来るのは他の誰でもない、自分自身だけなんだっていうことも。それを教えてくれたのは、あなた方アバンの使徒の皆さんです……もちろん、あなたもそうです、ヒュンケルさん。
きっとあのとき娘の脳裏には、彼女が敬愛して止まないひとりの男の姿が映し出されていたのだろう。数々の試練を乗り越え、もう少年と呼ぶのは申し訳ないほどに、たくましく立派に成長した、彼の弟弟子。
―――時は未来に向かって流れていく。その中で生きる人間もまた、未来に向かって生きていかなくてはならないのだと知りまし

た。時間は、どうしたって逆さには流れないものなのですから。もしも一時でもそれが可能になることがあれば、それは……
まっすぐに彼を捉えた彼女の視線が、そのとき遥か遠くに位置する何かを読み取ったように思えたのは、ヒュンケルの思い過ごしだっただろうか？
———……それは？
———それは、きっと……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

一瞬、ヒュンケルは自分がどこにいるのかを忘れた。
それはなんと不思議な感覚だったことだろう。突然、足場が大きく揺らいだような、歪んだ空間に投げ込まれてしまったような。身体が細かい砂の粒になって、折から吹きつけた風にさらわれていってしまうみたいな、と表現してもいいかもしれない。
こうした言葉を並べてみると何やら不吉な印象を得てしまうが、しかしながら実際のところ、渦中の彼の胸を占めていたのは、なんとも甘くじんわりとした温かさで———とにかく経験したことのない、不安定な心持ちがそのとき急に彼を襲ったのだった。
予期せぬ出来事に、呆然としていたのだろうか。我に返ったのはたっぷり数十秒は経ってから、左手を引く、か弱い力に導かれてのことだった。
「お父さん。ね、お父さんったら、どうしたの？」
それまでも何度も彼を呼び続けていたのだろう。ゆっくりと視線を向ければ、そこには不安そうな表情を顔一杯にたたえた、幼い少年の顔があった。
「お父さん。お父さんってば！」
夕日を受けて輝く銀髪が、ヒュンケルによく似ている。全体的に色素の薄い肌や瞳の色も、まるで彼の生き写しだ。ただ目の形は、切れ長のヒュンケルの目に比べ、幾分丸く、くりくりとして愛らしい。いかにも子どもらしい愛嬌を差し引いたにしても。

「ねえ、どうしたの？いきなり立ち止まっちゃって、石みたいになっちゃって」

どこか痛いの？それとも、何か悪いマホウにでもかかっちゃったの？

言葉を連ねるうちに心配が増してきたらしく、徐々に涙声になりつつある必死の呼びかけを聞きながら、ヒュンケルは意識が現実世界に戻ってくるのを感じていた。

ああ、そうだった。ここは森からの帰り道。そろそろ夕食の時間だというのに、遊びに出たまま戻らない息子を探しに来たのだった。泥だらけになった息子を見つけて、その手を引きながら村へと歩いて戻る途中。そこで突如、先ほどの感覚に見舞われて……。

「お父さん！ねえ、ねえ、お父さん！」

「……ああ。聞こえている」

頭上から降ってくる声音がいつもと変わりないことに、わずかに安心したらしい。少年はまだ少し緊張した顔をしてはいるものの、とりあえず父の名を連呼することはそこで止めて、高い位置の顔をじっと覗き込んだ。

「すまなかったな、心配を掛けて。ちょっと思い出したことがあったんだ」

「思い出したこと？」

「ああ、でもたいしたことじゃない。もう大丈夫だから、行こうか」

ゆっくりと歩き出すと、慌てて遅れまいとついて来る。もちろん歩調は幼子に合わせてだいぶ緩めているのだが、それでも小刻みにちょこちょこと歩く足取りが微笑ましい。

「ああ、びっくりした。急に目を丸くして動かなくなっちゃうんだもん」

「ははは……目を丸くしていたか？」

「うん、まるで人形みたいだったよ。ぼく、前に長老さまが話してくれたマホウを誰かにかけられちゃったのかと思って、怖くなっちゃったの」

長老というのは、彼らが住む村の前村長で、優に90歳にはなろうかという老人のことだ。ひどく面倒見のいい人で、よく村の子どもた

ちに昔語りなどしてくれているのだが、息子は長い白髪と髭に覆われたその外見を少し怖がっていて、彼によって語られる話をも、興味半分怖さ半分で聞いている節がある。
「長老さまは怖い話をしたのか？」
「お話は別に怖くなかったんだけれど……」
少年は、教わった話を父親に伝えようとやっきになって説明を始めた。どうやらそれは鋼鉄変化呪文に関する話だったようで、はるか昔にその魔法が編み出されたいわれを語ったものであったらしい。だがいかんせん、先日６歳になったばかりの息子の口から語られるには物語は複雑過ぎ、話はあっちへ飛んだりこっちへ戻ったり、理解するのに時間がかかる。それでもヒュンケルは、時に質問や相づちを挟みながら、辛抱強く彼の言葉に耳を傾けてやった。
前方には真っ赤な夕日が空を染め、ゆっくりと歩く父子の影を長く後ろに伸ばしている。風は、村から夕餉の香りをかすかに運ぶ。平和な光景の中、ヒュンケルの意識は先ほど己の身に起こった出来事を反芻し始める。

記憶というものは、扱いの難しいものだ。常に自分自身の力でコントロールされていればいいのだが、時として本人の意思とは関係なく、不意に意識の表層に浮かび上がってくることがある。
スイッチは思いがけず入る。そして多くの場合、人間は五感を通じて記憶の蓋を開かせる――例えばかつて見た光景や、どこかで嗅いだ香り。そんなものが、眠っていた過去を揺り起こすのだ。
ついさっき、息子と並んで歩く道すがら、ヒュンケルは突如、遠い昔に魂が引き戻されるのを感じた。本当に遠く、積み重なる時間の、はるか彼方にかすむ時代。今より二十数年前、地底魔城と呼ばれる場所で、無邪気に伸び伸び育っていたころに。
瞬間移動呪文に代表されるような、空間を高速移動することで身体が引っ張られる感覚とは少し違う。気が付いたら水に落ちていたときのように、一瞬の後には自分の周りを異世界が取り巻いていたといった感触だった。全身が一気に過去に浸され、でもそれが不快なのかと言えば、そんなことは決してなくて。腹の底からせり上が

り、彼を隅々まで満たしたのは、圧倒的な郷愁だった。
（一体、この懐かしさは何なのだろう）
血潮に乗って身体中を巡る何やら温かいモノの存在に、戸惑いと疑問、そしてわずかに喜びに似た感情をも感じ取りながら彼は考える。突然の出来事に二本の足は歩みを止めてしまっていたが、甘い痺れを覚える頭の片隅に、かろうじて冷静さを保つことは出来ていた。
（一体、オレは今何を……？）
目の前に暗い石壁が見えてきた。ほとんど暗闇に飲み込まれてしまいそうな石肌が、ろうそくの揺れる炎にぼおっと照らし出されている。じめじめと黴臭い空気に、蝋の溶ける臭いが混じる。独特の香りと漆黒のベールの向こうから、カツーンカツーンと響いてくる音があった。
（オレは、この音を知っている）
大好きな音だと思った。心臓が鼓動を速めるのが分かる。
（オレは、この音を待っていた）
意識の中で、幼いヒュンケルは走り出していた。（現実の彼は、身じろぎひとつすることも叶わぬまま立ちすくんでいたわけだけれども）。走って走って、思わず転びそうになってもまた走って……。
するとほどなく、回廊の曲がり角からひとりの人物が姿を現した。
（…………！）
ほんの刹那の間だけ、ヒュンケルの思考は少年時代の彼自身から浮き上がり、その人の姿に発すべき言葉を失う。だが瞬きひとつをするより速く、現在と過去、ふたりのヒュンケルの心は重なり合い……
―――父さん！
ほのかな灯りの中に見える養父の笑顔に向かって、「彼ら」は突進した。魔物でありながら、ヒトの子であるヒュンケルを慈しみ育てた、地獄の騎士・バルトス。駆け寄る息子を抱きとめようと、人間とは異なる六本の腕が大きく開かれている。そのうち左側最下部の腕が、幼いヒュンケルが手を結ぶ際の、いつもの指定席だった。今とは違う、まだ丸々と子どもらしい右手を、「彼ら」はそこに滑り込ませる。

———父さん！
（……父さん……！）
見下ろす養父の顔はこの上なく優しく、ヒュンケルはそれだけで無条件な安堵を覚える。何も怖いものなんて、ない。世界で1番大好きなこの笑顔に包まれていれば。
———　　　　　　　。
幼い彼自身は何やら一生懸命に養父に話し掛けていたが、その言葉はヒュンケルの耳には届かなかった。ただ、目の前にある視線を味わうことで一杯だったのだ。
———　　　　　　　。
———　　　　　　　。
少年が発した言葉に、バルトスが何か返事を寄越した。決して聞き漏らしたくないと、ヒュンケルは夢中で耳をそばだてる。だがそれも叶わず、代わりにそこで、繋いだ手がふっと離された。急にすうすうした風に晒されたヒュンケルの右手は、愛しいぬくもりを求めて虚空を彷徨う。
（父さん……父さん、どうしたの？）
「お父さん。ね、お父さんったら、どうしたの？」
左手を必死に引く力に我に返ったのは、その直後のことだ。
今しがたの経験が、何かの拍子に呼び覚まされた記憶のいたずらだったのだと、認識するまでには少々の時間が必要だった。側を歩く息子がいみじくも指摘したように、彼自身も不思議な魔法にかけられた風な心地を覚えていたものだから。
けれど、そう、これは魔法なんかではない。いつか耳にしたことがあるではないか。この世のどんなに偉大な魔法使いにも、時を逆流させせることは出来ないのだと。ほんの一瞬、懐かしい思い出が胸に去来しただけ……それだけのことだったのだ。
緊張の糸が解けた様子で、生き生きとおしゃべりを始めた息子に付き合ってやりながら、ヒュンケルは自分自身を納得させる。けれど理性はそう考えることが出来ていても、心は思いがけない邂逅に、未だ揺れを止められずにいた。
一本道の終わりに、村の入り口が見えてくる。夢中で話し続ける息子の母であり、ヒュンケルの最愛の存在でもある人が温かい夕食を

準備している、我が家のある場所。

養父のことを思い出したのは久し振りだった。いや、その言葉は正確ではない。彼のことを忘れた日など、物心ついてから1日とてないのだから。ただ、現在ヒュンケルが暮らす日常生活の中で、バルトスの在り方というものは以前とは確実に形を変えてきている。
昔、闇の道を歩いていた日々には、養父を奪った運命（そしてそれを為したと思い込んでいた勇者と正義）に対する復讐心こそが、ヒュンケルの生きる意味であり唯一の目的だった。眠りに落ちる前、彼は毎晩バルトスの面影を心に刻みつけていたものだ———必要以上に強烈に。そのあまりの強さに、彼の心は血を噴いた。痛かったけれど、その痛みを忘れないことこそが自分にとって必要なのだと言い聞かせていた。古い傷がふさがる前に、ヒュンケルはさらに強く憎しみを自らに刻み込む。新たな血が流れ、ただそのことによってのみ、彼は自身の生存を確認していたと言ってもいい。
だが、今は彼の妻となっている女性に出会い……明るい光の下で生きる術を教えられ……やがて恋に落ちて、でもそれは自分には許されないものであるとひたすらに感情を押し殺し……だけど大きな手に導かれるように、長い年月を経て心を通わせ結ばれて……。愛の結晶である我が子までをもこうして授かった今となっては、かつてのように痛みを伴うやり方で養父を想うことはなくなった。亡き父は、いまや穏やかな顔をして、彼の胸の奥底にひっそりと静かに眠っている。
それがどうして、こんな唐突に……。
風に乗って運ばれてくる香ばしい匂いに食欲をそそられたらしい息子が、はしゃぎながら語り掛けた。
「今日のごはんは何かなぁ？お父さんは知っている？」
「いや」
「ぼくを迎えに来てくれる前、お母さんはまだごはんを作っていなかったの？」
「いや、もう準備は始めていたさ。ただ、何を作っているのかまでは見えなかった」

「ふうん……そう」
何かもの言いたげな顔をしながら黙り込んだ少年に、ヒュンケルは水を向けてやる。
「なんだ。何か食べたいものでもあったのか？」
「うーん……お母さんの作るお料理はおいしいから、何でもいいんだけれど……」
さらに連ねたい言葉があるのは明らかな様子だったが、そこで口をつぐんだ息子に無理強いをすることをよしとしなかったので、彼もそれ以上会話を続けようとはしなかった。
夜が訪れる前に森に帰っていくのだろう、どこかで鳥が鳴き交わしている。その声だけが聞こえる世界で、ヒュンケルの気持ちは再び記憶についての考察に戻っていった。
何かきっかけがあったことは間違いない。それによって、長い時間を経た思い出が甦ったのだ。何が記憶の蓋を開かせた鍵なのだ……？
西に向かって足を進める父子の前方には、村のシルエットに覆いかぶさるようにして、大きな太陽が沈んでいこうとしている。夕日というのは、どことなく切ないものだ。見ていると、胸の奥がかすかに疼く気がする。今日という1日が終わり、それはもう永遠に戻らないものであると示されるからなのか———同じく、決して帰れぬ少年時代を想うことに似て、何か大切なものが手のひらからこぼれ落ちていくような不安感を抱かせる。もちろん、夜の向こうには「明日」という名の未来が待っていてくれるわけなのだけれど。
禍々しいほどに赤い光は、じっと見つめていると、人を時空の向こうに連れ去る魔力を秘めているかのようだ。遠い昔にも、同じ光を眺めていた気がしてくる。そう、バルトスの帰りを待ちわびていたあの日にも。でも、それは絶対に事実ではない。ヒュンケルが育っていた地下深くには、太陽の恵みは一切届かず、辺りは黒とそれに従属する暗い色に染め上げられていた。養父と過ごした日々に、赤い夕日の差し込む余地などあったはずはないのだ。
かといって、段々濃さを増す家庭的な匂いがきっかけとなったとも考えられない。温かい夕餉、それを整えてくれた人の、同じく温かい愛情。そういったものに親しみを覚えるようになったのは、本当

にここ数年のことであるし、そもそも地底魔城において同様の香りを知覚する経験など、皆無だったのだから。
ぼんやりと思考を廻らせていたヒュンケルの耳に、そのときか細い声が響いた。
「……でも……ピーマンだけはイヤだな」
「…………えっ？」
「だって……ピーマンって、苦いんだもん」
左を見遣ると、息子はうつむいて頬を赤く染めていた。（ひょっとしたら夕日のせいでそう見えただけかもしれないが）。
そういえば、この少年は野菜の青臭さが苦手で、中でもピーマンを嫌っているのだった。なるほど、先ほどから夕食の献立を気にしていたのは、それが今夜の食卓に上ることがあるのかどうかを気にしてのことだったらしい。
彼の母親は、常日頃から息子の好き嫌いを直そうと苦心していて、食べ物のことで文句を言うなんていけないことなのよ、と諭している場面を、ヒュンケルも何度も目にしたことがある。母の教えを従順に信じる彼は、自らの偏食を告白するのに恥ずかしさを覚えたのだろう。それならばいっそ何も言わずに黙っていればよさそうなものだが、父親に隠し事をし通すのも心苦しかったと、おそらくそういうわけなのだ。あわよくば、父の耳に届かなければいい。そんな思いでぽつりと囁いた小声は、残念なことにヒュンケルの元へしっかりと届いてしまったわけではあるが。
「なんだ。そんなことを気にしていたのか」
「だって……」
「何でも食べないと大きくなれないぞ」
「うん、分かっている。お母さんもそう言っていたし……」
そこで少年は、縋るような視線でヒュンケルの顔を見上げた。
「ぼく、ちゃんと大きくなりたいもん。ねえ、お父さんは嫌いな食べ物はないの？何でも食べたからそんなに大きくなれたの？」
必死な口調に、ヒュンケルは思わず笑い出すところだった。実際、彼にも苦手な食べ物はいくつかある。絶対に食べられないというわけではないが、基本的に甘いものは嫌いだし、こってりとし過ぎた味付けのものよりは、断然さっぱりした後口のものの方が好みだ。

妻はそのことをよく知っていて、彼らの家のテーブルにそういったものが姿を見せることはほとんどない。だが、正直にそう息子に伝えてしまうのは、教育効果を考えたときに好ましいことではないだろう。そこでヒュンケルは、愛情に満ちたささやかな嘘を我が子に告げることにする。
「ああ、父さんには好き嫌いはないよ。だから背も伸びて大きくなれたんだな、きっと」
「そう……そっか……」
少年はわずかに落胆したような顔を見せたが、父親の返事は半ば予期していた内容だったのだろう、すぐに気を取り直すと明るい調子で言葉を続ける。
「じゃあ、ぼくもピーマンを食べられるように頑張る！ねえ、ちゃんとピーマンが食べられるようになったら、ぼくにも剣の使い方を教えてくれる？」
「ああ、何でも食べられるくらい強い子になったらな」
「分かった！頑張るよ。だってぼく、お父さんみたいに強くて大きな人になりたいもん」
瞬間、あの不思議な感覚が再びヒュンケルを包み込む。彼の中に甦る声があった。

――――ねえ、父さん。ぼくも父さんみたいに強くて立派な剣士になりたい。

ああ、鍵はここに落ちていたのか。開かれた記憶の扉の向こうから、響いてきたのは紛れもなく幼い日の彼自身の声だった。そしてさらに奥側から、あんなに焦がれた恋しい声が聞こえてくる。

――――ははは。そうか。だがお前は、ワシよりもっと強くて大きな人間になってくれ。

瞳に鋭い熱を感じた。太陽を直視してしまったために痛みを覚えたのだと思おうとしたが、そうでないことなど分かっていた。
あの日もこうして手を繋いで歩いていた。時間も場所も、遠く隔

たった幸福の日々に。立場までもが異なり、憧れの眼差しで養父を見上げていた少年は、今や父親となって我が子のことを見下ろしている。それでも、交わされる情愛は、二十数年を挟んで何ひとつ変わってなどいない。
今初めて、ヒュンケルはバルトスの本当の心に触れた気がしていた。
養父はあるいは、人間と魔物の間に生まれた擬似親子としての関係が、脆いものであると察していたのかもしれない。いつまでも永遠に、こうして手を結んで生きていけるわけではないと。だからこそ、共に過ごせる一時一時をあんなにも慈しみ、息子にとってかけがえのない思い出へと昇華させてくれたのかもしれなかった。たとえそれが、なんら特記すべきことのない、さりげない日常風景であったとしても。
親と子は、必ずいつか別れる日が来る。終わりなく、この両の腕で庇護してやれるものではない。けれどこの上なく愛した存在にこそ、この世の最上の幸福を手にしてもらいたい。願うしかない立場は、もしかしたら切ないものであるのかもしれないが、目にすることの叶わぬ未来を信じ、親というものは注げる全てを子に与えつくすものなのだろう。
養父の願っていたものは、決して復讐などではなかったと。すでに理解はしていたつもりでいたけれど、こんなにも切に、喉の奥が焼けるような想いでそう感じたことはなかった。ずいぶんと遠回りをし、多くの間違いを犯してしまったが、ようやく彼の心に追いついたことを、養父は喜んでくれるだろうか？あの赤く染まる空の果てで。
（見守っていて下さい）
震える胸で、ヒュンケルは祈る。
綿々と続く生命の系譜の中で、地の底で生きた父子の小さな物語は、いつか歴史の波に飲まれて消えていくことだろう。起こった事実は忘れ去られても、それでも彼には、ただひとつだけ次の世代へと繋ぎ渡せるものがある。久遠を紡げる可能性がある。
（あなたに会えて、よかった―――あの日々も、今日も）
「あっ、お母さんだ！ただいまーーーっ！」

村の入り口に、ほっそりとした女性の姿が見えた。ひとつにまとめられた長い髪が、夕暮れの風になびいて揺れている。赤みの強い髪の毛に、夕日が一層眩しい輝きを与えていた。
父親の手から飛び出した少年は、子犬が転がるような勢いで母親の元へ駆けてゆく。柔らかい胸に飛び込むと、剣とかお父さんという単語が、途切れ途切れに聞こえてきた。
「そう、よかったわね」
乱れた息子の髪を優しく指で梳きながら、遅れて到着した夫に彼女は微笑みかける。
「おかえりなさい、ヒュンケル。お腹が減ったでしょ？」
彼が応じるより速く
「うん、もうぺこぺこ！今ならピーマンだっていっぱい食べられるよ！」
元気のいい回答が辺りに響く。
「ねえ、だから早くおうちに帰ろう。今日のごはんは何かなぁ？」
「さあて、何かなあ？」
くすくすっと笑った母親に左手を預け、それから少年は右手をヒュンケルの方へと伸ばしてきた。
「さあ、お父さんも早く行こう」
親子三人で手を繋いで家路を辿りながら、ヒュンケルはこの情景をこそ、永遠に刻み付けたいと願う。犯した大罪を償い続けることに変わりはない。それでも人を愛する心を失わずにいることが、重要であり真実であるのだと、夕日が胸に焼き付けてくれた気がした。
母の胎内に包まれているような、限りなく優しい赤い光の記憶と共に。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

―――それは、きっと奇跡なんですわ。
娘は一切疑うことのない瞳で、そう言い切った。
―――……奇跡？

———ええ。奇跡です。
半信半疑の思いが顔に出ていたのかもしれない。娘はふっと笑うと
———奇跡は決して夢物語ではありませんわ。事実、大魔王との戦いの中ででも、そうとしか形容のしようのない現象がいくつか起こったでしょう？
———それは……そうだが。
———それは、人間の人智をはるかに超えた力。理屈も摂理も、何をかもを飛び越えた、天からの賜りものですね。神さまは、そうそう簡単には奇跡を与えては下さいません……もしかしたら神さまご自身にだって、そう簡単に操れるものではないのかもしれません。
神秘を見通す、占い師。彼よりも年下の少女ではあったけれど、彼女が語る神についての物語は、常に不思議な説得力を持って胸に響いたものだった。
———けれど時おり、悲しみや苦しみに溢れたこの世界を哀れにお思いになられて、神さまはお慈悲を与えて下さいます。私たちは、それを奇跡と呼ぶんですわ。
———なるほど。
長年、神など信じてはこなかった。もし神の存在があるのであれば、どうして彼の人は、幼かった彼にあれほど過酷な運命を背負わせたのかと。
でも今なら、神ははるか天空から人間を見守っているのだという教えを信じることも出来る。暗いトンネルの中、手探りでもがき苦しんでいた彼に、遣わされた天使の姿を知ったのだから———あの出会いは、占い師の語るところの慈悲であるのかもしれなかった。
———奇跡、か。確かにオレたちはその力に何度もこの身と心を救われてきた。もしもそれらが起こらずにいたら、あるいは魔王軍の側に起こっていたなら、きっとオレたちはこうして今ここに存在していることは出来なかっただろう。
———そうですね……でも、それはおそらくあり得なかったことだと思いますわ。
———……何故？
———だって、
娘はそこで、黒真珠のように輝くふたつの瞳を、まっすぐにヒュン

ケルに向けて微笑んだ。
―――奇跡を呼び起こせるただひとつの方法、それは「愛」に他ならないと思うからです。己のためだけでなく、他者のためにも懸命に生きること。それが種となって、時に人の力を超越した、神の花を咲かせるんですわ……愛のないところに、奇跡は起きません。愛だけがそれを成しえることが出来るのだと、私はそう信じています。
穏やかに言葉を紡ぐ占い師の目に、そのときヒュンケルは不思議なものを見た。
彼女の瞳が、赤く染まっていた。ゆらゆらと揺れる炎に照らされるように……いや、そのように激しい光ではない。もっと柔らかくもっと温かく……確かに強い光ではあったが、それは絶対的な優しさを感じさせる、包み込むような赤だった。
……この色は一体……？
突然の出来事に驚くヒュンケルの前で、一瞬の後に彼女の瞳は元の涼やかさを取り戻す。夢から覚めたような表情を浮かべた少女は、大きくひとつ息を吸い込むと、戸惑うヒュンケルに静かに語り掛けた。
―――……あなたにもいつか、奇跡が訪れる気がしますわ。
―――……えっ？
―――あなたが「愛」に満たされて生きるとき……そのとき、時の流れをも逆流させる、そんな奇跡が起こるという予感がします……恐れないで下さい。それは大いなる優しさに包まれた、美しいものですから。
ですから。言いかけて娘は、ふいっとそこで口をつぐむ。
―――あとは私の口にすべきことではありませんわね。
―――…………
―――あなたにはもう、それが十分に分かっていらっしゃるはずですから。
そこで少女は視線をヒュンケルから外し、神秘の瞳を彼から隠してしまった。これ以上、何を尋ねても答えてはくれないと、線の細い横顔が語っていた。
―――……きゃっ！

彼らの背後から、突然強い風が吹きつけた。華奢な少女は、ただそれだけの力にも思わず足元をよろめかせてしまう。慌てて支えの腕を伸ばしたヒュンケルに、彼女はありがとうございます、と微笑んで礼を述べた。
―――すごい風でしたね。
―――ああ。
乱れた髪を手櫛で直しながら、でもいい風だった、と娘は呟く。確かにな、と応じながら、ヒュンケルは今の風が彼の背中を押してくれたことを感じ取っていた。
過去から、あるいは立ち止まっている現在から。未来へと一歩を踏み出させてくれる風。明日に向かって、流れる風。

終